

おいしいベランダ。
午前1時のお隣ごはん

竹岡葉月



富士見L文庫

contents

一章

まもり、練馬で最後の晩餐につきあう。 5

二章

まもり、沼の一端を垣間見る。 82

三章

まもり、ご恩と奉公、
そして周到な作戦に打って出る。 153

四章

まもり、収穫の時に踊る？ 212

エピローグ

Every day is a new day. 281

おいしいベランダ。クッキングレンビ 284

あとがき 285

わたしの素敵なものは、いつも一番近くで光ってる。

一章 まもり、練馬で最後の晚餐ばんさんにつきあう。

はじめの一報は、栗坂くりまかまもりが高校三年の夏をしていた頃にやってきた。

その時まもりが住んでいたのは、神奈川県かわさきは川崎の社宅で、自転車じてんしゃで石油コンビナートも見に行けるコンクリートジャングルは、夜になろうがいっこうに気温が下がらない。

昼間の余韻を残して生ぬるくとぐろを巻いた熱気を、ドアと窓ガラスでシャットアウトして、居間にある年代物のクローラーをフル稼働させ、まもりは受験の参考書と取っ組み合っていた。

——るるるるん。るるるるん。

父親が居間で遠慮なく流している、大音量のナイター中継は耳障りだし、絨毯じゅうたんに寝そべってスマホのゲームをしている、弟のやつは目障りだ。しかしまもりの部屋の四畳半にクローラーは無く、居間から流れ込んでくる冷氣だけが頼りなのだ。ふすまを閉めることはできなかつた。

——るるるるん。るるるるん。

そしてこちらが『奥の細道』の品詞分解に集中しようと思っっているのに、居間の電話がさっきからうるさい。

「ちょっとねえ、電話鳴ってるよー！」

わかっている。

栗坂家の男どもは、自分の携帯にかかってこない電話は、絶対に取らない。

「お母さんは？」

「——風呂」

足下で弟が答えた。スマホの液晶から、まったく視線をそらさぬときた。

——るるるるん。るるるるん。

ああもう。まもりは舌打ちしたくなりながら、シャープペンシルを置いて立ち上がった。床に寝そべる弟を踏んづけて、四畳半を出す。弟は、潰れたカエルのような声をあげたが知るものか。

問題の固定電話。液晶画面には、見慣れない携帯電話番号が並んでいた。

(誰?)

一瞬ためらうと、目の前で留守番電話に切り替わってしまった。

まもりは慌てて、受話器を取った。

「——もしもし？」

『……あ、良かった繋がった。こんばんは、栗坂です……って、一緒だね。その声はまもりかな?』

「え——もしかして涼子お姉ちゃん？」

まもりの声が、うわずった。

栗坂涼子は、まもりの父方の従姉妹だ。

「うわ、どしたの。すっごい久しぶりだよ。最後に会ったのいつだっけ。おじいちゃん
の法事の時? 元氣してた? あのとき寝違えてた首治った?」

『元氣よ元氣ー。ちょー元氣。首もちゃんと治った。あのさあ、ちょっと叔父さんか叔母
さんに用あるんだけど、いい?』

「え、お父さんたち?」

まもりは、受話器をおさえて後ろをチラ見した。

父は阪神にホームランを打たれて、泣き崩れている。

「ごめん、お父さんはナイターで、お母さんは半身浴から出てこない」

『あちゃ。そうかそういう時間帯か……』

父はひたすら肩を震わせている。こと野球に関する限り、父の涙はユニクロより安い。

「何、お父さんたちに用事って、もしかして結婚の報告？ 結婚式するの？」

「ち・が・い・ます。あんたらはもうすぐそれだ。もういいやまもりでも」

まもりでもとはなんだ、まもりでもとは。

相変わらず、アバウトで適当な涼子お姉ちゃんである。

『あのさまもり、私ね、転勤の辞令が出たんだ』

「て、転勤？」

『そう。ダラス』

結婚から転勤。そしてダラス。

ずいぶん飛んだ。どう考えても、四十七都道府県内にはない地名だ。

ではどこの国のどのあたりに……と言われると、これまた自信がない。大きな都市だとい

うのは、なんとなく分かるが。

「そ、それは……おめでとうって言っているのかな」

『うん。海外赴任は、ずっと希望してたしね。夢が叶って、私自身はすごい嬉しい。して

やったり』

「良かったじゃない」

『で、問題はいま住んでる家なわけよ。まもり、確か今年を受験だと言ってたよね？』

「そうだよ受験生だよ」

『第一志望が律開大だっけ？ 池袋の』

「……まあ、夢は大きく持った方がいいって言うし」

本当は今でも、ちょっと無謀だったかと思っているが。

旧帝大に余裕で入った涼子にしてみれば、ささやかな私大かもしれないが、まもりにと

っては、清水の舞台から飛ぶ大博打だ。この夏にどれだけがなげられるかだと、夏休み前の

面談で、担任教師は言っていた。

『じゃあちょうどいいよ。まもり、あんたそこ受かったら、私のマンションから通う気な

い？ 最長で四年間』

「え、マンション？」

『練馬に借りてる、私のマンション。南向きの1LDK。私の転勤は期限付きだし、終わ

ったら元の部屋に戻ってきたいのよ。家具とか大きいのは置いていきたいし、あんな立地

いい場所、借り直すとなったら大変だもん。ね、どう？』

——練馬のマンション。

——1LDK。

——受かったら一人暮らし。

(一人暮らし)

都内で。

カチリと頭の中で、何かの鍵かぎが開いた気がした。

「——かつ、通う通う通う！ 絶対通う！ 一人暮らしする！」

興奮気味のまもりの声に、栗坂家の男二人の視線が集まった。

テレビの中の東京ドームは、またも阪神の追加得点。しかしまもりには関係ない。

『そう。じゃあまずは受からないとね。浪人はなしよ！』

「ないないない！ 絶対受かる！ がんばるから大丈夫！」

その時のまもりはもう、自分の行く先に、薔薇色ばらいろの未来しかないと考えていたのだ。

——いやはや。

——一人暮らしって、難しい。

栗坂まもりが、大学入学を機に一人暮らしを許されるにあたって、親と約束したことが三つある。

その一、毎日一人でちゃんと起きる。

その二、戸締まりには気をつける。

その三、朝・昼・晩、新鮮な野菜をいっぱい食べる。

はじめにその条件を出された時は、「小学生じゃないんだから！」と反発したものである。

だが実際に一人で生活をはじめて、一ヶ月半。これがなかなか難しいと知る。

特に三番目の、『野菜をいっぱい食べる』というやつが。

「……あ、あー。やっぱりダメになっちゃってたか……」

朝。まもりは冷蔵庫の野菜室の前に、がっくりとうなだれた。

一週間前にスーパーで買いだめておいた、特売のレタスと、特売のきゅうり。

売り場にあった頃のレタス様は、しゃきつと新鮮な感じで、きゅうり様はビニール袋に詰め放題の、超お買い得品だった。

でもどちらも最後まで使い切る前に、溶けたり異臭を放つようになってしまった。お腐

りになっちゃった。

(……昨日あたりから、なんかシナシナしてたと思ったら……)

敗北してしまった。これでサラダを作って食べようと思っていたのに。

いかげん安いからと言って、冷凍できないものを大入り袋で買ってはいけないと、学習しないといけないかもしれない。

まもりは結果としてダメにしてしまった野菜を生ゴミ入れに放り込み、いっそうガランとしてしまった冷蔵庫内を眺めやって思う。

思えば川崎の社宅で、父と母と弟との四人暮らしをしていた時は、これぐらいの量の肉や野菜など、ぺろっと冷蔵庫からなくなっていた気がする。

でも今は、1LDKのマンションにまもり一人。

あの頃の常識やスケール感では、冷蔵庫の食材が消費できずにダメになる一方だと、痛感しているところだ。

(だってほら。キュウリ一本とかレタス四分の一とか買うより、袋入りとかまるまる一個買った方がお買い得な気がするから……ね?)

目先の数字に飛びつく、貧乏性が恨めしい。

なまじ冷蔵庫の方が、一人暮らしに不相応な大きさの、3ドアファミリータイプなもの、

買い込みに歯止めがかからない原因かもしれない。

—— いったい涼子は、どうやってここで暮らしていたのだろう。

まもりが一人暮らしをはじめたこのマンション、『パレス練馬』五〇三号室は、本来の借り主がいる。御年二十八歳の独身バリキャリな従姉妹、栗坂涼子だ。

まもりが物心つく頃から、美人で優秀だった『涼子お姉ちゃん』は、先日ついに海外進出を果たし、ダラスへと赴任してしまった。聞いた時はどこだか分からなかった地名も、今は検索によりアメリカ南部の大都市だと調べがわっている。

最長でも四年という期限付きの転勤で、地の利のある住居を手放すのは嫌だと、かわりにまもりが暮らす話が持ち上がったのだ。

(こんなことでもなかったら、都内のマンションで一人暮らしなんてできなかったよ。家賃だって、普通に借りたら凄そうだし)

このマンションは、六階建ての鉄筋コンクリート製で、外観は瀟洒なレンガ造り風。築年数こそ古めでオートロックもないが、八畳の寝室に、台所とリビングがあわせて十五畳という広さだ。

南向きの大きめのベランダからは、さんさんと朝日だってさしこんでくる。

これで西武線と地下鉄の練馬駅から、徒歩十分という近さ。しかも、まもりが第一志望

にしていた池袋の大学にも、一本で行けるといふ好立地だった。受かったら一人暮らしができるという人参じんじんを鼻先にぶらさげ、まもりは闇黒あんくろの受験期を乗り切ったと言っている。

そして晴れて川崎の社宅を出て、こうしてレタスときゅうりを腐らせているわけだ。

——まずい。こんな惨状、母に知られたら大変だ。

もともと母は、まもりの一人暮らしには反対だった。

川崎と池袋。別に自宅から通えない距離でなし、未成年の女の子が一人暮らしなんて危なすぎるという主張に、あの涼子ちゃんだって普通に暮らしていたんだからと、まもりは必死になって説得にあたったものだ。

『あの子の場合は、別よ。タフじゃなくて鈍すぎるのよ。丈夫なのはいいことかもしれないけど、女の子としてはちょっとどうなのってぐらい。だから浮いた話が出る前に、海外なんてことになっちゃうのよ……』

とは母親の弁。

なかなか鋭い、主婦の経験からくる見解かもしれないが、そこはうなずいてはいけなないのでがんばった。

「ごめんなさいお母さん。けっきょくサラダも作れませんでした……!」

まもりは大急ぎで菓子パンをインスタントコーヒで流し込み、大学へ向かう支度をはじめる。

なんだか最近、いつもこんな感じだ。

コンビニのサラダやカット野菜を買うのも、毎度だとお財布に敵しい。庶民の味方だと聞いていた、もやしの足の速さときたら世界陸上なみだ。

朝はいつだって時間ギリギリで、三食野菜を食べるのお約束も危ういけれど、せめて残りのお約束、戸締まりだけはしっかりりだ。

まもりは何度もガスの元栓と鍵を確認して、五〇三号室の自室を出た。

エレベーターでマンションのエントランスに降りていったら、ちょうどマンション内に入ってくる人がいた。

(——あ、亜瀉あがさんだ)

ラッキー。今日はいいい日だと勝手に浮かれる。

彼は、まもりの隣の部屋、五〇二号室に住んでいるお隣さんだ。

年の頃は、たぶん涼子と同じか少し上の、二十代後半だろう。百八十センチ超えのすらりとした長身に、モード系のおしゃれなスーツを着ていつもすれ違うから、勝手にイケメンエリートさんと呼ぶこともある。

確かフルネームは、亜潟葉二だと言っていたか。
この亜潟さん。かなり忙しい職についているらしく、お隣の部屋に帰ってくる時間帯は、完全にまちまちだ。まもりが深夜にコンビニへ行く時にすれ違うこともあれば、こうして朝方になって、顔を合わせることもある。

本日の亜潟葉二氏は、ノーネクタイの黒のワイシャツに、カルバン・クラインのタイトなグレイのスーツという取り合わせだった。大きな凶面も入りそうな書類ケースを足下に置き、一階のメールボックスにたまった、チラシや郵便物を取り出している。

高校や自宅の周辺では、まずすれ違わなかった人種だ。

朝から亜潟さんに会えるとは、本当についている――。

思わずその場に立ち止まって、『眼福』という言葉の意味について考えていたら、向こうと目があってしまった。

「――すみません。邪魔ですね」

「いっ、いえ。こちらこそすみません……」

勝手に突っ立っていたせいで、郵便物を取りたいと思われてしまったらしい。葉二は書類ケースごと一步横にずれて、あらためてチラシの仕分けをはじめた。

今さら見とれていましたと打ち明けるわけにもいかず、まもりは低姿勢でメールポック

スに近づく。かちかちと、自分の部屋のダイヤル錠を回す。

それでも気になるのは、やはりお隣の葉二の方だった。

四月の頭に『居住者交代』の挨拶をした頃より、やや瘦せただろうか。彫刻刀で鋭く削り出したような輪郭が、いっそうシャープになっていた。

それでもこの、ちょっと一重気味で理知的な目がいいのだと思う。高く通った鼻筋に、眼鏡をかけたら似合いそうな気がする。もちろん銀縁の細いやつがいい。

たぶん仕事とか、むちゃくちゃできるんだらうな。そういうのが側にいても伝わってくるというか。

「あの、お仕事、毎日大変そうですね」

「――え?」

意外そうに葉二が顔を上げた。

「いま帰ってきたんですね。すごい忙しそう。大変そう」

あせるといっそう、どんな顔をしていいかわからない。結果としてしまりのない笑顔になってしまったまもりに、葉二は少し考えこんだ。

「……まあ、忙しいは忙しいですけど……そういう仕事ですから……」

「そうですねか!」

「ええ。それじゃあ、お先に失礼します」
「お疲れ様です」

低いがやわらかい葉二の声音は、ほどよく落ち着いていて、いつまでもまもりの耳に残る気がした。

エントランスから遠ざかる長身の背中に、ただため息が出る。

（『仕事ですか』か。くー。かつこいいなあ……！）

自分がいくつになったところで、あんな風にスマートには言えないぞと、感心してしまふ。

いつもすれ違って、たまに挨拶するだけのお隣さん。きっとああい隙のない人は、冷蔵庫のキュウリを腐らせたりはしないに違いない。

（というより、そもそも自炊しない感じ……？）

高いワインに合うチーズなどは、完璧にストックしてありそうな気がするが。

おそらくモノトーンを基調とした、生活感のないリビングにおいて、低めの音量でジャズをかけ、ワイングラスを傾ける——そんな亜潟葉二を想像したら、非常にしっくりきた。

家具は絶対イタリア製だ。もしくはアメリカの六〇年代アンティーク。

思いついた映像は満足がいくもので、これでしばらく愉快に暮らせる気がした。

たとえ自分の郵便物に、いたずらの『怪文書』が交じっていたとしても、強く生きていくはずだ。

最寄りの練馬駅から池袋まで、快速で十分足らず。

ラッシュはさすがに窮屈だが、駅から歩いている時間の方が、長いぐらいだ。

練馬区は戦後になって板橋区いたばしから独立した、二十三番目の特別区だ。俗に言う東京二十三区の、一番最後の区ということになる。

当時の土地の七割は農地だったそうで、今でこそ私鉄に加えて地下鉄の乗り入れで、都心部への通勤通学は格段に便利になったが、のんびりした緑の多い街という印象はそのままだ。

駅の周辺を離れてちょっと奥に行けば、公園どころか現役の農家の畑にお目にかかれる。このあたり、川崎の重工業地帯で育ったまもりにとってみれば、ずいぶんと意外で息のしやすい環境だった。

しかしまだなんにも、この街の探検ができていない。

先月末にはじめて書店バイトのお給料がたまったら、可愛い自転車でも買って、通学や

ポタリングをしてみるのも手かなと思っっている。

「——野菜食べてるかって?」

「うん。湊ちゃんはどうしてる? 料理とかしてる?」

一限目の語学の授業には、大学で最初に仲良くなった友人、具志堅湊がいる。

湊は目鼻立ちがはっきりした沖繩美女で、最近ようやく電車で移動する生活に慣れてきたらしい。学部も同じ文学部だ。

まもりと同じく親元を離れ、寮暮らしの身。何か参考にできることはあるかと思っただが。

「そーんなの、無理言わないでって感じさねー」

彼女は南国出身らしいおおらかさで、ケラケラと笑った。

「あ、無理は無理なんだ」

「無理だって。うちの部屋のちっちゃいIHのコンロ一個じゃ、お湯わかすので精一杯」

「だよねえ」

「おじやおばあと一緒に暮らしてた頃ならともかくさ。無理してキャベツとか買っても、食べきれないし。バイトとか歓迎会が続いて、久しぶりになんか作ろうかって冷蔵庫開けたら、奥でしなしなになってるの見つけて萎えたり」

「わかるわかる! そうなのよ!」

「だからもうだめだー、お肌カカササで栄養足りてないさーって思った時は、できるだけバイトの賄いで補充することにしてる。あとは野菜ジュース?」

「……う。うちのバイトは賄いもないや……」

職の選択を誤ったのだろうか。

「ビタミンのサプリとかあるけど、あれって何をどんくらい飲めばいいの?」

「さあ。とうかが高いでしょ、サプリ。野菜買った方がよっぽどまし」

「でも腐るんだよ」

「そうそう持てあますさー」

そして当初の問題に立ち返るのである。

「なんかしかしたこと話してんなー、具志堅も栗坂も」

まとめて笑い飛ばしてくれたのは、後ろの席にいた男子学生だった。

この授業ではよく顔を合わせる、法学部一年の小沼周だ。

お隣にいる眼鏡男子の、佐倉井真也とよく連んでいて、周の方とはとにかく陽気でよく喋る。

「野菜が腐ってもったいないって言うなら、俺に食わせてくれよ。弁当とか。俺いつでも

待ってるから。カモン」

「凶々しいさあ、実家暮らしが一人暮らしにたかろうっての？」

「ひでー。差別だ」

なんでも高校時代は、放送部に在籍していたそうで、比較的がっしりとした体格も相まって、ライブ用のアンプかスピーカーが、そのまま喋っているようなイメージだ。

今は湊と同じ映画鑑賞サークルに入っているらしく、その周と湊が、遠慮なく言葉のボールを投げ合っている横で、まもりは真也に聞いた。

「佐倉井君は、自炊とかする？ 野菜食べてる？」

確か彼も、仙台から出て来て、一人暮らしだったはずだ。

しかし真也の方は、常に陽気な周の陰に隠れるように寡黙で、なんだかところどころがない。

意外と綺麗な顔をしているのだが、今のところ彼と一対一で一番長く話したが、英会話のロールプレイでジョニーとリンダの役をふられ、拙い英語で会話した時ぐらいという体たらくである。

確かあの時真也は、熱帯魚が好きだと話していたが、あれはジョニーとして話したのか、真也本人の趣味なのか、いまだに確かめたことがない。

「……料理は、あんまりしない」

「そう。外食？」

「金ないし、家でカップ麺とか、安い牛丼とか」

「栄養偏ってるなあって思った時は？」

真也は、まもりの質問を受け、眉の根を寄せた。

「……あの彼は、」

「……気合いを入れる？」

「そう答えた。」

「気合い」

「そう。気合い多めで」

ひどく真剣かつ、シンプルな回答だった。

みんな唸った。

「……そう言われると、それでいいような気もしてくるね……」

「プレイステスだしね」

「気合いいっとく？」

「きあーい」

「おいおい、真剣に検討すんなよおまえら」
 思わず流されそうになるぐらい、真也の回答は魅惑的だった。主に手間暇がかからないという点で。

かめはめ波のような謎気合いポーズを取る湊が、一転して周の机に頬杖をついた。
 「だって小沼ぁ。ほんとに一人で暮らすって、めんどくさいさぁ。楽だけどやることも多いって言うか」

「ああ吹いてるぞ吹いてるぞ。具志堅サマから先輩風がびゅーびゅー吹いてるぞ」

「湊ちゃんの言う通りだよ。わたしもまさか、メールボックスのいたずらに悩む日が来るなんて思わなかったよ……」

ついでに付け足したら、みんなの視線がいつせいに降り注いだ。

「なにそれ」

「え。うん、べつにそんな、大したことじゃないんだよ。たまーにね、一階のメールボックスに、変なチラシが入ってたりするんだ……」

「エロ系？」

「そういうんじゃないなくて……ほんとによくわからない感じ。あ、待ってて。今日は現物があつたはず……亜潟さんのおかげで……」

ちようど出がけにメールボックスを覗いてきたおかげで、他の郵便物ごと、鞆につっこんで来たのだ。

寿司やビザの出前のチラシ、通販の払い込み票に交じって入っていたのは、A4半分ぐらいのコピー用紙に印刷された、モノクロの写真である。

現物を目にした湊が、怪訝そうに顔を近づける。

「え。何これ……」

「たぶん練馬駅北口の、駅前広場だったことはわかるんだけど、あとは何がなんだか……」

もともと画素数の少ない写真を、むりやりモノクロで印刷し、さらにはコピーを重ねているようで、線のほとんどが潰れてしまっている。

駅前広場のモニュメントである、ガラスのピラミッドの周りを、大勢の人が行き交っているのはわかるが、それ以上はさっぱりだ。かろうじて見分けがつく人の顔にも、見覚えはまったくない。

周と真也にも、チラシが回った。

「実は栗坂を撮った盗撮写真とか？」

「ちよっ、怖いこと言わないでよ小沼」

「……うん、実はそれも考えたんだけどね」
「考えたんだ」

ぎょっとした顔で溼に言われるが、どうしたって可能性は考えてしまうだろう。

「ただねえ、そのセンはないと思うんだ」

「本当に？ この潰れて判別つかないところとかに、交じってないか？」

「そうじゃなくて、この写真よく見てよ、小沼君。みんなダウンとか冬服着てるよ」

「あ……」

ようやく周は、まもりが何を言いたいかわかったようだった。まもりはうなずいた。

「このピラミッドにも、なんか飾り物がついてるし。昼間の写真だからわからないけど、クリスマスイルミネーションなんかじゃないかな。わたしが練馬に越してきたのって、三月の末だよ。十二月は川崎の家から出ないで、センターの追込みしてた」

つまりどうやってもこの写真に、まもりは写りようがないのである。

「確かに意味わかんねえ……」

「もしかしたら、わたしに向けたものじゃないのかもしれない。あのマンションの不特定多数に入れてる、チラシなのかなって」

「だったら、管理人さんに聞いてみればいいんじゃないの？ 苦情が上がってるかも」

「……やっぱりその方がいいと思う？ 湊ちゃん。別に実害とかは、なんにもないんだけど」

「なんでそこで渋るのよ」

「渋ってるわけじゃ……ただうちのマンション、管理人さん常駐じゃないんだよね。わたしが帰る頃には、いつもいなくて……こう、ずるずると時間が……」

管理会社も土日は休みで、なおさら電話をかけにくいのである。そして今になってしまった。

ああ、なんだかみんなのこちらを見る目が、とたんに冷たく感じる。

「まもり。気持ちにはわかるけど、そこはがんばろうよ」

「ああ、がんばっとくとこだ」

周にまで、哀れみの目で見られてしまった。穴があったら入りたい。

「………はい。わかりました。次、管理人さんに会えたら必ず」

「会えたらじゃなくて会うの。時間作るの」

「うう。善処します……」

そこまで言ったところで、語学の外国人講師が、教室に入ってきた。

話はそこで、いったん終了となった。周からチラシを返してもらい、英語のテキストに

頭を切り替えたのだった。

「――栗坂」

計九十分の講義が終わり、湊と一緒に教室を出たところで、まもりは名を呼ばれた。誰かと思えば、佐倉井真也が、走って追いかけてくる場所だった。

まわりに周はいなくて、真也だけのようだ。

「……どうしたの、佐倉井君」

しかし真也は真也で、こちらに追いついたはいいものの、どう切り出しているか迷っているようだった。かけていたハーフリムの眼鏡をおさえながら、

「あの。さっきの件」

「さっき……」

「写真。チラシの」

そこまで言われて、授業前の雑談の件だとわかった。

「うん、チラシがどうかしたの」

「……ちゃんと相談しとけよ」

「するよちゃんと。管理人さんに確認でしょう」

「それだけじゃなくて。警察とか」

「け」

さすがにそれは、大げさではと思った。

「俺、法学部入ったし。まだ基礎の基礎で、なんにも専門的なこと教わってないけど、刑法とか興味あって。ストーカー規制法とかあるし。相談するだけならタダだから。ほら」

「わ、わかったよ。教えてくれてありがとう」

わざわざ自分のスマホを取り出して、まもりに法律のページを見せてくれたので、とりあえずお礼を言った。

真也は言うだけ言って満足したのか、最後に「気をつけろよ」とだけ念押しして、去っていった。

そんな一部始終を後ろで見ていた湊が、子泣き爺じじいのようにのしかかってきた。

「……そこで見せちゃうのがウィキペディアってところが、佐倉井クンのあれなことだよ
ね」

「湊ちゃん、重い……」

「普通自分のアドレスでしょ。怖くなったらいつでも連絡して。キリッ、みたいな」

「いやいや、ありがたいよ、ほんと……」

どうでもいいが、走り去った真也の背中に、気づいたことがある。背負っていたリュックの金具に、革細工のアロワナがぶらさがっていた。熱帯魚好きはジョニーの趣味ではなく、彼の趣味のようだ。

そして、今度こそ寄り道をしないで早めに帰宅した結果、見事管理人さんを捕まえることに成功したまもり。

チラシの一件を話したものの、そんな苦情はまったく上がっていないと言われてしまうのである。

それから数日は、実に平常運転だった。

慣れない変則的な時間割や、レポート作成に悪戦苦闘しながら学業に邁進し、放課後は書店バイトでレジを打ちまくる。

バイトが終わって練馬のマンションに帰ってくるのは、どんなに早くても九時過ぎだ。

(おなか減ったでござる……)

自分は今、実に原始的な欲求に支配された顔をしているに違いない。飯、風呂、その次は寝る。

世の中には、もっともっとハードなサイクルで暮らしている人もいると聞く。しかし、しんどいものはしんどい。もう少ししたら、今の生活にも慣れるだろうか。

レンガ色のタイルで装飾された玄関をくぐり、エントランスホールに入る。すぐ脇のメールボックスには、先客がいた。

黒っぽい上着に、着古したデニムをはいた横顔が見える。染めずにそのままの黒髪が、うなじよりも長いので、一瞬女性かと思ったが、男性であっているはずだ。丸まった背の、やや中性的な輪郭。

はて。うちのマンションに、こんな人いたのだろうか。

妙なひっかかりを覚えたが、まもりとて全ての住人の顔を、把握しているわけでもない。そのまま足早に、メールボックスの前を通り過ぎた。

今はわざわざ順番待ちをしてまで、自分の家の郵便物やチラシを回収する気力もないのだ。

(最近、亜潟さんにも会えないなあ……悲しい……)

最後に会ったのは、あのメールボックスの前で話した朝か。

心のオアシスに遭遇できないというのは、こんなにも気力の充実に影響を与えるものなのか。知らなかった。

五階にある自分の部屋の鍵を開け、廊下を歩いてリビングへ踏み込む。いろんなものが山積みになったソファの上に、さらにテキストで満杯の鞆を積み上げ、まずは部屋着に着替えた。

「ごはん、ごはん」と吹きながら、キッチンの食料庫を開けた。

「う」

見事なまでに、何もなかった。

インスタントラーメンも、レンジでチンするご飯も、ストックがつかっている。

「れ、冷凍……」

ショックを受けながら、冷蔵庫の冷凍コーナーを開ける。だが、食パンも、炊飯器で炊いた、冷凍ご飯もなかった。そうだった、冷凍ピラフだって昨日の夜に食べきったではないか。

（馬鹿！ わたしの、馬鹿！ 今日なんにもないから、スーパーで買い物するって決めてたでしょう！）

家に帰って料理をする段になって、思い出すのでは意味がない。

まもり。考えるのだ栗坂まもり。きつとどこかに、食べるものがあるはずだ。

我ながら真剣になって食料庫の奥と最上段、さらには流しの下を点検したら、日本茶の缶と、真空パックの切り餅を発見した。この切り餅はアリだ。採用しよう。

「主食はお餅として、野菜は……」

まもりは、冷蔵庫の野菜室を確認する。

脱臭剤と、ニンニクとオレンジしか入っていない。

「……の、海苔って海藻だから、野菜にカウントしていいのかな。いいことにしようね。あとは……ええいキムチも付けよう！ 白菜！ 超野菜！」

キッチンカウンターの上に、切り餅二つ、海苔のパック、冷蔵庫からキムチのタッパーを取り出して並べてみた。

——欺瞞、という難しい漢字が、頭の中に浮かんで消えた。

だいたいここを乗り切ったところで、明日の朝はどうする。朝もはよからキムチをたいて、満員電車に乗る？ 人としてどうなのだそれは。

（ダメ。アウト。ぜったい）

こうしている間も、カウンターの向こうに広がって見える、リビングの荒んだ光景が、よりいっそうまもりの心を寒々しくさせるのだ。

涼子がダラスに赴任する時、大型の家具や家電は、そのまま残していつてくれた。まもりはそれを、ありがたく使わせてもらっているわけだが、ソファの上には荷物如山積み。テレビも点いていない時は、液晶の埃が丸わかりだ。テレビの前のローテーブルの上には、マイクのセットが、朝に使った時のまま取り残されている。

まもり以外、誰も片づける人がいないのだから、こうなるのは当たり前だ。こういうのが、一人暮らしなのか。

社宅の頃は、狭い四畳半の中ですんでいたカオスが、今や部屋全体を侵食していた。

受験生の頃は、今日という日が来るのが楽しみで嬉しくて、いろいろなことに想像を巡らせていた。でも、憧れ続けたあの夢の中に、こんな場面はぜんぜん出てこなかった気がする。

馬鹿だなあ、わたし。

思わず自嘲する。いつもこうなのだ。ぼんやりして、何に対してもツメが甘いことから。「……いい、いや。ここで負けちゃいけない……」

まもりは、キムチのタッパーを、冷蔵庫に戻した。

今からでも遅くない。徒歩五分のコンビニに行って、サラダと明日のパンとヨーグルトを買ってくるのだ。

文化的な生活を、諦めたら試合終了だと、偉い人も言っていたではないか。

まずは家でくつろぐ姿勢だった体にムチを打ち、部屋着の上から薄手のパーカーを着込んだ。ナイロンのシヨルダーバッグにお財布と鍵だけ入れ、玄関から表へ出た。

(シヨーパーンは、無謀だったかな?)

五月の下旬。日中は夏日になるぐらいの日もあるが、さすがに夜の外気は別なようだ。

やや肌寒い。

むきだしで素足に、さっそく後悔しかけたが、着替えに戻るのも面倒だった。まもりはわざと早足でエントランスを抜け、コンビニに向かった。

住宅街の暗い夜道を進んでも、その先にコンビニの明かりがあるとほっとするのは、まもりだけだろうか。

蛍光灯の強い明かりに、染みついた夜が漂白されていくような感じだ。

まずはお総菜コーナーで春雨のサラダとカット野菜、別のところでヨーグルトとパンをカゴに入れ、雑誌を買うべきかちょっと悩んでスルーする。

レジで会計をしてくれたのは、同年代に見える男性店員だった。対応はかなりきこちな

かったが、お互いがんばりましょうと、心の中で勝手なエールを送った。

明日は学校帰りにスーパーへ行く。ちゃんと正しく買い物をする。絶対に忘れない。でも今日だって適当ですませないで、コンビニに出直してサラダを買った。明日の朝ご飯もちゃんと確保した。これでもう良しとしようではありませんか。

(部屋の掃除と洗濯は……週末にまとめてするから!)

そうだ。それまでは、気づかない&見ないふりをして乗り切れればいい。

出てきた回答に満足して、まもりは家路を急いだ。

行く時と同じ、五分少々でマンションの入り口にたどりつき、流れですぐ脇にあるメールボックスに向かう。

鼻歌交じりにダイヤルを回し、中のチラシを取り出し——そこで心臓を、きゅっと攪まされた気がした。

——まただ。

またあのチラシが入っていた。

口の中に、何も入っていないのに苦みが広がる。

まともに中を見るのも嫌で、その場でくしゃくしゃに丸めて、パーカーのポケットに突っ込んだ。すぐにその場を離れた。

(しばらくなかったのに。嫌なもの見た)

エレベーターホールで、なかなか降りてこないエレベーターの到着を待っていたら、

「ねえ」

声がかかった。

まもりが不思議に思って振り返ると、知らない男が立っていた。

あたりを見回しても、彼以外誰もいない。まもりと、その男の人しかない。ホールのオレンジがかった照明に、男の黒髪がてらてらと光っていた。

誰これ、と思いかけて気づく。

(あ)

たぶんさっきの人だと思った。

バイト先から家に帰ってきた時、メールボックスの前にいた男だ。

黒っぽい上着は、あらためて見ると、分厚いブルゾンだとわかった。今は五月の半ばを過ぎていなのに、完全に真冬の格好だ。

いくら夜でも暑くないかと思ったが、長髪の額に浮かぶ汗を見て、ちぐはぐさに拍車がかかる。

「ひ、ひさしぶり。髪型、変えたんだね。ずいぶん、雰囲気があった」

なに言ってるのこの人。

こんな人知らない。わからない。

こわい——。

「ショートも、似合うと思ってたんだ。僕の言った通りだ」

だから知らないよ。あんた誰。

まもりは、思わず後ずさる。待っているエレベーターが、ようやく一階に降りてきた。でも、この男もついてきそうな状況で、乗り込む気になどなれない。

開いたエレベーターを放置したまま、奥にある階段へ行こうとした。

「無視かよおい！」

いきなり手首をつかまれた。

その声や握力の強さよりも、ぐっしょりと濡れた手のひらの感触に、悲鳴が出そうになった。全身が栗あわ立った。

「やめて」

「馬鹿にすんなよ。無視なんてしていいと思ってるんのか。写真の件だって終わってないんだぞ。え!？」

「や、やめてくださいって、言ってるでしょお!？」

拒絶の声は、悲しいぐらいにひっくり返った。つかまれた手を振り払ったら、コンビニ袋がすっぽ抜けた。春雨サラダがホールの床に散乱した。

男が「あーあ」という顔をした。でも構っていられたなかった。まもりは全速力で男から逃げた。

五階ぶんの階段を、休まず一気に駆け上がって、自分の部屋の前までたどりつく。

(鍵)

恐怖のせいか息切れのせいか、手がひどく震えて、ショルダーバッグの中の鍵がうまく探せない。ようやく鍵を見つけ、鍵穴に差し込む。

表、裏、今度はなかなか正しく入らない。どうか落ちて着いて。でも速く。

「はや、はは、はやく、はや」

ようやく鍵が、鍵穴にはまる。いそいで回して中へ入る。

——ピン、ポーン。

(!)

心臓が押し潰つぶされそうになる。

とつさに玄関から離れた。壁つたいに廊下を後ずさる間も、インターホンは鳴り続けた。リビングまで来ても、まだ。

ドンドンドンと、拳でドアを叩く音もした。

「栗坂さあん、いるんでしょお」

間延びした、あの男の声。

(……ちょっと待って。わたし、あのあと鍵閉めた?)

大急ぎで部屋に入って、その後。

記憶がかすんで曖昧だ。閉めたような気がする。閉めていないような気もする。

閉めているなら、まだいい。

でも、もし閉め忘れてるなら——。

「栗坂さあん！ 最近マジで変ですよ。どうかしちゃったんですかあ」

こいつが中に踏み込んできても、おかしくない。

インターホンの連打とドアノックが続く中、まもりは大慌てで辺りを見回した。

玄関側にあるトイレやバスに近づくのは、無理だ。鉢合わせしそうで怖い。

少しでも音が聞こえない場所へ、遠くへ。背後にあるベランダへ出て、ガラス戸を閉め

る。しゃがみこんで耳をふさいだ。

(何が最近変よ。写真の件？ あんたなんて知らない。見たこともない——)

——本当に？

恐怖に押し潰されそうな脳裏に、ちりりと違和感が走った。

まもりはもう一度、記憶を巻き戻してみた。チラシ入れの前にいた、どこか中性的な猫

背。半端に伸びた長髪。真冬仕様のブルゾン——。

(冬)

まもりは、ハッとした。

パーカーのポケットを探って、丸めてしまいいこんでいたチラシを取り出した。

くしゃくしゃになっていた紙面を伸ばし、そこに印刷された写真に目をこらす。

暗すぎてよくわからないが、今の男とそっくりの男が、この中に写っていた気がする。

何十回も、繰り返し見てきたのだ。

——ピン、ポーン。

ガラス戸を閉めてもなお、恐怖の音は聞こえてくる。

(もうやだ)

まもりは目を閉じた。

一人暮らしの本当の怖さが、わかっていなかった。冷蔵庫に何も無いなんて、テレビの埃がうつつとうしいなんて、そんなのどうでもよかった。不便さなんてがまんできる。

一番怖いのは、たぶんこういう時に助けを求める相手が、近くにいないことだ。

（——佐倉井君。警察に相談って、電話したらいつ来てくれるの？ 何分かかるの？）
答へはない。

今のまもりは、ベランダのガラス戸を開けて、ソファの上に置いた鞆かばんから、スマホを取り出すことさえ難しいのだ。足が震えてしまつて動かない。

五階という高さが、今さらながら、恨めしくてたまらなかつた。

明日出す資源ゴミの袋だけが置かれた、砂っぽい真つ暗なベランダ。コンクリートの上
に、自分がこぼした涙の跡だけができていく。

そして。怯おそえきつたまもりの耳元に、ガラリと——ガラス戸が開く音が飛び込んできた。
(え)

まもりは慌あわてて、濡ぬれた顔を上げた。

どうやらお隣の住人が、ベランダに出ているらしい。

避難通路の隔壁越しに、人の気配や物音がする——気がする。

「……そろそろ替え時かな、これは」

小さな独り言まで、聞こえてきた。

この声は——亜潟葉二だ。

まもりはもはや、なりふり構かまっている余裕などなかつた。

「あの、亜潟さん」

空から下りてきたお釈迦じや様の糸に、手をのぼすつもりで言った。

かすれそうになる声を、細く締めりそうになる喉のどを、必死に叱咤しつたして振り絞しぼる。

隔壁の向こうにいるはずの人に、どうか届とどいてと。

「亜潟さん。亜潟さんですよ。お願いします。助けてください」

まだ反応はない。

「変な人が、追いかけてきてるんです。ずっと家の前にいて。インターホン鳴らして。こ
ちには覚えなんてなんにもないのに。怖こくて」

喋しゃべっているうちにも、下で手をつかまれた時の恐怖感おそみが蘇よみがえってきて、うまく話すことが
できなくなりそうになる。でも落ち着しいてと、心を奮ふい立たせて言い聞かせる。

ちゃんと落ち着かないと、この糸いとだつて切きれてしまう。

「だからさっきからここ、ぜんぜん動けなくて。助けて、くれませんか。お願い、します。

亜潟さん」

お願いだから。

どうか。

「……表でずっと騒がしいの、そのせい？」

落ち着いた低い声が、ひと言返った。

返ってきた！

「……は、はい。そうなんです」

「わかった。じゃあ、そこにいて。様子見てくるから」

会話はそれだけ。まもりが待っていても、亜潟葉二はそれ以上何も返してこなかった。

本当に、様子を見に行ってくれたのだろうか。こちらの言うことを、聞いてくれたのだろうか。

まもりがベランダにいては、確かめる方法もない。

ただ、ずっと続いていたインターホンの連打は、なくなっていた。

「——はあ、なんだよおい。関係ないだろ、殺すぞ！」

ひとときわ大きく響いた男の怒声に、ぞっとした。

(殺す!)

冗談じゃない。そんな駄目。

まもりはベランダからリビングへと飛び込み、廊下を走って、玄関のドアを開けた。

恐ろしいことに、かけたかどうかわからなかった鍵は、かかっていなかった。

「亜潟さん！」

共用廊下に顔を出すと、右隣の部屋のおじさんも、そのまたお隣の若夫婦も、表に出てきていた。

そして、スーツの上着を脱いだ状態の亜潟葉二が、長髪男の関節を逆に決めて、床に押し倒していた。

男は組み敷かれた格好のまま、さがるようにまもりを見上げてくる。

「いてえ……痛いよ。助けてって涼子」

まもりは首を横に振り続けた。

「ちがう。わたし、涼子じゃない」

「嘘つくなよ。なあ涼子」

「——栗坂さん。とりあえず、一一〇番して。やばいのは間違いない」

葉二に言われ、まもりはハッとした。

大慌てで、スマホを取りに走り、生まれてはじめてかけた、一一〇番通報。

通報の後も、若夫婦はずっとまもりの側にいてくれ、白髪頭のおじさんは、葉二と一緒に
 になって、男の確保につきあってくれた。

パトカーでやってきた二名の警察官が、まもりたちのフロアに上がってきたら、長髪男
 が大声で泣きはじめた。

すいません、ごめんなさいとひたすら謝り続け、さきほどの怒りや暴言が嘘のようだっ
 た。

「涼子が、涼子がいけないんだよ……」

だからわたしは、涼子ちゃんじゃないのに。

言いたい言葉はなかなか出てこなくて、それでも警察の手に男の身柄が引き渡されると、
 心底ほっとした。

お守りのように握りしめていた、通報したスマホと一緒に、その場にしゃがみこんでし
 まう。

その肩を、後ろから誰かが叩いた。

「……もう大丈夫だよ、栗坂さん」

葉二だった。

——終わったんだと、ようやく思えた。

(うわ……もうこんな時間?)

警察署の建物を出て、あらためて現在時刻を確認してぎょっとする。真夜中というか、
 もうあと少しで明日だ。

「いま、何時?」

「に、二十三時五十二分です。亜潟さん」

まもりの頭越しに、スマホの画面をのぞき込まれ、あわてて答える。

「けっこうかかるものなんだな……当たり前か」

「すみません、こんなところまでおつきあいいただいて」

「……まあ、乗りかかった船だから」

淡々と葉二は答える。

簡単に言ってくれるが、本当に彼にとっては、余計な手間だろう。

まもりがベランダの隔壁越しに出した、SOS。もしあれをスルーされていたらと思うと、今さらながらぞっとしてしまう。

葉二はまもりを助けた上に、こんな時間まで、警察の聴取につきあってくれた。

上着なしのワイシャツの背中を、できることなら拝みたい。むしろ許されるなら、飛びつきたいぐらいだ。

(落ち着け、わたし。それじゃ変態)

あまりに刺激的なことが連続でありすぎて、情緒がおかしくなってきた。その自覚はあった。

あの逮捕現場に立ち会ってくれたご近所さんと、その後に行った練馬警察署で聞いた話を総合すると、いくつかわかったことがあった。

あのまもりにつきまともっていた長髪ストーカーは、もともとの住人である栗坂涼子の方に、執着していたらしい。

毎度メールボックスに入れてきたチラシの写真は、涼子がSNSに投稿していたもので、ネット上で偶然それを見かけたところから、つきまといが始まったのだそうだ。

写真はすぐに削除されたものの、無断でアップされたことに対する謝罪だの落とし前だのと言った因縁を、男はずっとつきまともって付けていたというのだから、恐ろしい話だった。

た。

『ただねえ、栗坂さん……あなたの従姉妹いとこなんですって？ 彼女、ぜんぜん気にしてなくて。普通なら怖がるような待ち伏せとかされても、うるさいとか失せろとか罵詈雑言のちやんで切り捨てて、おしまい。取り付くしまもない感じだったの』

というのは、二つ隣の若奥さんが教えてくれた情報だ。いかにもタフで大きっぱな涼子らしい対応だが、今はその大きっぱさが恨めしい。教えておけ、そんなどこか問題を置いていくのなら。

涼子の塩対応に、マゾヒスティックな快感さえ覚えていたストーカーの方も、中の住民が入れ替わっているとも知らず、まもりがまるで初対面のような恐がり方をしたものだから、逆上のスイッチが入ってしまったらしい。これは、さっき聞いた警察筋の情報だ。

まるでも何も、本当に初対面だったのだが。

「ほんとに、涼子ちゃんがあんまりっていうか……どうしてこんな重要なこと教えてくれなかったんだって感じですよ……」

「まあ、そこは仕方ないと思うしかない」

「思えませんよ」

「まさか君と栗坂さんを、ストーカーが取り違えるなんて思わなかったんだろう」

「……それは」

「元の栗坂さんは、君と違って大人の女性だったし、色で言うなら濃いめのシグナルレッドみたいな雰囲気だったろう。普通は間違えない」

「ええまあ、そうなんですけどね……涼子ちゃんみたいな華のある美人と、わたしを比べるなんて、おこがましいっちゃおこがましいんですけど……」

それでもはつきり言われてしまうと、ちょっと辛いというか傷つく。

涼子とまもり。

年はかなり離れているが、骨格や目鼻のパーツは、父方の祖母そっくりだと、親戚一同から太鼓判を押されている。しかし、美人の賞賛を一身に集めてきたのは、涼子の方だ。

年始の集まりで親戚に言われるのは、『まもりちゃんはこれからよ』『今だってシルバニアのうさぎちゃんみたいで可愛いわよ』といったたぐいの慰めだ。

そしてその横では、すらり八頭身のバービーみたいな、完成系の涼子が君臨しているのである。

成長期も過ぎた今となっては、シルバニア（動物）がバービー（人類）になれる日など来そうにないとわかっている。

葉二と並んで夜道を歩きながら、やや葉二の方の間があいた。

「……むしろ俺は、同じパーツでここまで他人に与える印象が違うのかって、そういう話をしてるつもりなんだが……」

「はあそうですか。だから月とスッポン、薔薇とべんべん草とか、そういう話ですよね」

「……認知の歪み、か……」

「人参の歪み？」

はあつ、とため息をつかれた。たぶんかなり本気で。

まもりでもわかる。今のは采れられたか、可哀想な子扱いをされた感じだ。

亜潟さんって、実はけっこう……意地悪だろうか。

クールでスタイリッシュな紳士を想像していたのだが、その予想図に、細かなヒビが入っていくような。

元のマンションに戻ってきて、まもりは真っ先に「うっ」と顔をしかめた。

一階エレベーターの前に、自分がぶちまけたコンピニのサラダもろもろが、袋ごとそのままになっていた。

「……亜潟さん……これ、明日になってから掃除してもいいですよね……」

「夜食の買い出しだったのか？」

「いえ。もろ夕飯、のつもりでした……」

ため息が出てくる。

袋入りのカット野菜と、ヨーグルトはともかく。ドレッシング入りの春雨サラダは、べつとりとタイルやコンクリートの溝にまで張り付いてしまっている。

早いうちに取り除いた方がいいのだろうが、今日はもうくたくただ。勘弁してもらいたい。

「じゃあ、夕飯抜きか」

「大丈夫です。キムチのパックと、ノリと切り餅もちがまだ……」

またもや、頭の上でため息をつかれた。

「いくらなんでも、侘わびしすぎるだろう。なんならうちで、食べていくか」

「え」

まもりは、愕然がくぜんと顔を上げた。

——今、なんとおっしゃいました？

葉二はあくまで平然と、整った顔立ちをこちらに向けている。

「い、いいんですか？」

「ちょうど食事の支度をしていた途中だったんだよ、そっちに呼ばれた時が。個人的に祝杯あげたいことがあったんだけどな。もう今から一人ぶん作るのも、二人ぶん作るのも、

手間は一緒だ」

だから来てもいい、ということらしい。

しかし——。

「心配しなくても、食事だけだから。ここでどうこうするなんて思われても、俺の方が困る」

「あ、いえ別に。そういうことでしたら、お言葉に甘えてぜひ……」

「じゃあ、決まりだな」

葉二が言ったところで、エレベーターが一階にやってきた。

中に入り込みながら、遅れて『たいへんだ』と興奮がこみあげてくる。

まさかこんな形で、亜潟さんお宅訪問が実現するとは思わなかった。

やはり想像してきたように、モノトーンを基調とした家具に、低めの音量でジャズのだらうか。それとももう少し違うテイスト？

あれこれ考えているうちに、エレベーターが、五階に到着した。葉二が五〇二号室の鍵かぎを回し、ドアを開ける。廊下の照明がついた。

どきどきしながらお邪魔したお宅の間取りは、まもりの部屋を左右反転させただけで、ほぼ同じのようだった。

リビングに入った第一印象は——『緑』だ。
びっくりするほど、グリーンが多い。

家具やカーテンの色の話ではない。部屋をそこかしこに、植物のグリーンがあるのだ。生きている植物の葉。莖。茂るグリーン。

窓辺に近いテレビボードの脇にも、水槽のようなガラスの温室が置いてあり、中で小さな植物たちが葉を茂らせている。

だが、むしろこの部屋そのものが、植物のための温室ではないだろうか。

「ちよっと着替えてくるから、適当に待っていてくれるか」

「あ、はい！」

葉二が寝室へ消えていく。まもりはとっさに返事をするが、日は周りの植物たちに釘付けだった。

——驚いた。まさかのナチュラル系だったとは。

モード系の見かけに寄らない、意外な展開もあったものだ。

まもりが腰掛けたソファ自体は、黒革と金属フレームでできた重厚なものだった。そこで目に入るローテーブルの上には、ショットグラスに半分まで満たされた水。そしてそこにも数本の植物が挿してある。

まあなんというお洒落……と顔を近づけたまもりは、はたと止まった。

(なんだろう……わたしにはこれが、三つ葉を切ったやつにしか見えない……)

三つ葉だ。雑炊やお雑煮の上に散らしたりする、あの薬味の三つ葉だ。その根っこに近い部分だけを、グラスに生けてあるような。

根っこの部分に、それぞれ四角いスポンジがくっついている所もそれっぽい。

(う、ううん。そんなわけない。あの亜潟さんにかぎってそんな)

きつとまもりが知らないだけで、この三つ葉もどきにだって、カタカナで長そうな、シヤレオツな名前がついているに違いない。ジャーマン〇〇とか、イングリッシュ〇〇とか。きつとそうに決まっている。

「——飲み物だけでも、先に開けておくか？ ビールは？」

「あ、お気遣いなしでけっこうです。わたし十八なんで……」

「え、未成年か」

これ以上失敗したくないと、アルコールを辞退したまもりに、この世の終わりのような声を出した葉二。そんな彼を振り返ったまもりは、また目を丸くした。

——亜潟さん？

寝室から出てきた亜潟葉二は、黒いジャージの上下に、太い黒縁のセルフレーム眼鏡と

いう出で立ちだった。

そりゃあ眼鏡が似合うだろうと思ったことはある。しかしあれはカルバン・クラインのコレクションラインに、銀縁細めのチタンフレームであって、こんな三本ラインジャージにゴンぶと黒縁ではない。

スーツの時は絶妙なお洒落パーマだった髪型も、現状では『寝癖』の二文字がしっくりくる。

「……なに？ 俺の顔に何かついてる？」

「いえ……ふ、普段はコンタクトなんですねと……」

「そう。めちゃくちゃ度がきついから、一日はつけてられないんだわ。外すと生き返るってか、肩こるしな」

「肩が……」

「さてじゃあ、飯だ。ちゃっちょと作るぞ」

気がつけば、格段にくだけた言葉を使うようになった亜潟葉二は、カウンターキッチンへ向かった。まもりは、あわててその後を追いかけた。

彼は冷蔵庫のドアを開け、中段に置いてあった、刺身のパックを素早く確認する。

「飯は多めに炊いてあるから良しとして……刺身が一人前なのが問題だな。野菜増やして

どんぶり
井にするか」

まもりの見間違えでなかったら、その刺身のパックには、『半額』の値札が貼られていたような気がする。

亜潟さんと半額。

スペースシャツとタンポポぐらい、かけ離れた言葉だと思っていた。

「——なあ、おい。栗坂……若い方。ちよつとベランダ出て、適当に野菜摘んできてくれないか。蕪とか薬物がそろそろ行けるはずだから」

「へ？」

「はいザル。あと夜だからヘッドライト」

ぼんぼん、とテンポ良く金属ザルと、引き出しから取り出したライトをセットにして手渡された。

まもりはザルを持ったまま立ち尽くす。

思わず中を、二度見した。

黒いナイロン製のバンドと、その先に手のひらサイズのライトがついている。

ヘッドというからには、これを頭に装着しろというのだろうか。たぶん、『工事現場』とか『洞窟探検』とか、そういう場所で使用されるもののような気がする。

なぜこれを、キッチンザルに入れて渡されないといけないのだろう。額から発光する自分を想像するが、用途が全く分からない。

亜潟葉二は、ベランダに出ると言っていた。その後何をしろと言っていた？

「なんで……懐中電灯では、ダメなんでしょう……」

「両手ふさがってたら、作業の邪魔だろう。なんだ、もしかして着け方がわからないのか？ 栗坂鈍くさい方」

「——っ」

無造作に引き寄せられ、その手で頭を触られた。

髪が髪が髪が。手が手が手が。こちらがそう意識せずとも、スイッチを押されたように顔がカッと熱くなるが、そうしてできあがったのは、ヘッドライトを頭につけた栗坂まもりである。

ライト本体のつまみを切り替えると、光ったり消えたりする。

「はー……」

「ぼさっとしてないで。行くぞベランダ」

続きは、5月14日発売の富士見し文庫で！

©Hazuki Takeoka 2016